

交流と連携

京都大学生存圏研究所
居住圏環境共生分野 教授
農学博士 今村祐嗣

はやり言葉

大学で仕事していても、使う言葉にこだわる時期というものがある。組織の改革とか予算要求を行う際は、とりわけ用語に注意する必要に迫られる。最近、特に耳にすることが多いフレーズの一つが「連携」である。例えば、異なる学部や研究所が個別に対応するのではなく、部局間が連携して物事を進めていこうとか、あるいは大学相互が手をつないで連携しようとか、学会と産業界が連携を強めようとか、すぐにいくつか思いつく。つい最近までは交流という言葉の方が一般的であったが、いつしか連携に取って代わられた気がする。以前は大学間交流とか国際交流といわれていたのが、今は大学間連携であるとか国際連携ということになっている。産学連携しかりである。

交流と連携はどう違うのか。交流というと個人的に独立してやっているものが、相互に行き来して顔を合わすというイメージが強いが、連携となると目的意識を強くもって、共同で何か形のあるものを達成しようという意味合いが強くなるように感じる。無駄を省き、効率性を向上させる側面がある一方で、従来の枠組みでは果たせなかった、あるいは得られなかった新しいものを創出しようという願いもあるようだ。ところで、英語ではどう違うのだろうか。辞書で連携をひくとコーポレーションという単語が出てくるが、交流を検索するとエクステンジとかコミュニティという言葉が表れる。英語のコーポレーションは、極めて範囲が広く、協調、協力、共同という単語の訳には一様に該当する。私の感覚では、交流を一步進めたものが連携で、さらに、利害が一致すると提携(タイアップ、アソシエーション)とい

うことになるのであろうか。

われわれの大学でも医工連携と称した先端的な研究開発が行われているが、ここでは人工臓器の開発や診断技術の研究など医学と工学のそれぞれの分野の専門技術を持ち寄って、新分野が開拓されている。昔、映画で見た「ミクロの決死圏」ではないが、曲がりくねった小腸内壁の観察で活躍している移動式超小型カメラなどは、工学的技術の支援があつてのものであろう。また、遺伝子関連の生命科学分野では、理学、医学、農学の研究者が連携しながら、しのぎをけずっている。こういった最近の医学や生命科学分野などの自然科学系の分野横断的な技術開発ばかりでなく、先日のある「お知らせ」では自然科学と社会科学の連携研究の募集案内、などというタイトルの文書にお目にかかった。従来のサイエンス一辺倒の方向が本当に人類を幸せにするのか、未来の地球環境の保全や持続的社會を果たして構築できるのか、という疑問と反省の上に生まれてきたように思える。もっと社会科学的な視点なり展望が必要ではないかということであり、専門化した技術だけでなく、俯瞰的な科学技術が必要だという論議と共通している感じがする。

砥の粉

現代社会の科学技術における新規分野の開拓と、効率的な発展のために必要となってきた連携ではあるが、一つの技術分野においても、まだまだ連携すべきところがあるのではないだろうか。木材や住宅産業においても、異分野はもちろん関連分野内でも、もっと連携すべきではないか。そんな「内部連携」を考えていたところ、私の地元の新聞(京都新聞10月

国産材利用を推進するために……

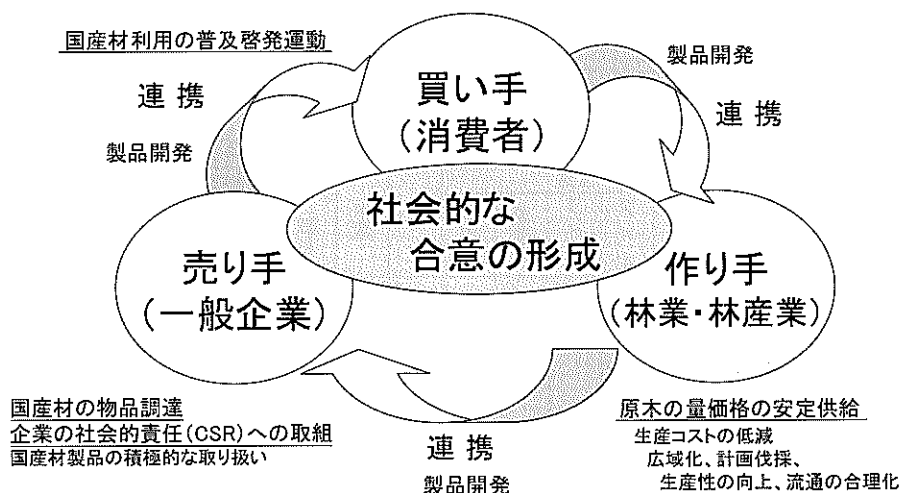


図 「木づかいのススメ」運動における木の利用促進のための「連携」(提供：京都大学川井秀一氏、東京大学安藤直人氏)

31日号)に「砥の粉」の話が報じられていた。記事は、昔に比べて生産する会社も減ってしまったが、何とか多くの人に砥の粉の良さを知ってもらおうとホームページを開設している会社があり、砥の粉の製造方法や使い方なども紹介していて、最近は、問い合わせも増えているというものであった。砥の粉は、ちょっと年齢の行かれた方なら子供の頃、木の工作で塗装下地の目止め剤として身近に使っていた粉で、水で溶いて塗りこめた後、乾くと表面がすっかり滑らかになった印象をお持ちの方も多いのではないかと思う。もともとは漆塗りの下地処理には欠かせない砥の粉であるが、そのほとんどが京都で生産されてきたということであった。京都市の東に位置する山科の西野山で取れる良質の風化した岩石を原料として製造されているという。風化の程度によって異なる種類の砥の粉が作られるが、細かく粉砕された後、水で沈殿させて、プレス、乾燥させ、再度粉末にし、粒度をそろえたりして用途に対応した製品が製造されている。この砥の粉は、木地の目止め剤や接着剤の添加物以外に、かつてはレコード盤の材料として、あるいは歌舞伎役者の化粧の白塗りとしても使われていたらしい。

実は、この山科という場所は私が日常的によく通っている場所であり、そんなところに砥の粉という木材に深くかかわってきた材料の産地、それも我が

国唯一の生産場所があることがびっくりであった。我ながら足元の不明に恥ずかしいと思うと同時に、こういったことは他にも数多くあるのではないかと思いついた。人類の歴史とともに発展してきた木材の技術には、相互に支えあってきた数多くの材料や技があるのは当然であろう。あるものは、時代の変遷とともに意識の薄らいでいったものも多いが、もっと足元の連携に絶えず目を配っておくことが必要ではないだろうかと思つた。

ところで、図は日本木材学会が主催した「日本の森を育てる円卓会議」の提言に沿った「木づかい運動」から借りてきたスライドである。木材の利用促進、特に、国産材の利用を広げていくために、国産材を使うと日本の森は元気になる、木づかいの積極的な情報発信をしよう、企業も真剣に国産材を使うことを考えよう、消費者も協力しあって国産材を使って環境に配慮していこう、家庭や学校教育の現場でもっと国産材に親しもう、をモットーに掲げ、従来の「作り手」だけの対応ではなく、「売り手」と「買い手」の双方へもっと働きかけ、連携を強めていこうということを運動目標にしている。

森と木と人とが交流に終始することなく、一歩進めて内と外に連携することによって木材利用の輪がより広がることを期待したい。

